
empty complex

冴島岐之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

empty complex

【ZPDF】

N1645D

【作者名】

沢島岐之

【あらすじ】

一度とこの土地に戻つてくるものか、そう思つていた。側にいられないと知つてから、私は泣けなくなつたから。

やつぱりこんな高校来るんじゃなかつた。まわかにんなといひで
会つなんて、思つてもみなかつたから。

入学式を終えて戻つてきた教室では、早速できた友達が、おそらく他の子も、同じ話題で盛り上がつてる。

「ちょ、さつきの見たつ？」

「生徒会長でしょ？ マジかつこいかつたよねー」

あーあー、やんなるよ。今から転校とかできないのかな。そう思いながら、田の前に集まつた三人ほどいる女の子たちを見つめていた。

気楽で、良いな。

「ね、^{アキ}紀ちやんは？ あの生徒会長かつこよかつたよねえ」

「あー、やうかもね」

一番最初に私に話し掛けてきた希美に呼ばれて、私はあははと顔だけで笑つた。どうか気付かれていませんように。

まだ高校生活は始まつたばかりだといつのに、私、暗いな。疲れてるみたいだ。

私が適当に相槌を打つてると、担任だという先生ガラリと勢いよくドアを開けて入つてきた。定年間近ですという雰囲氣のおじさんだ。初日だからか、わりかし静かなクラスメイト達はすぐに席へ

と戻つてこつた。私もそれに従つ。どうでもいいけど、早く帰りたいと思つ。下手したら、見つかってしまうから。

「じゃあ、今日はこれで終わりだ。号令、はまだいないから、出席番号一一番のイイダ」

「キーワード、レイ」

「わよーなうー」

ざわざわと教室が喧騒に飲まれていく。誰の視線にも止まらない内に教室を出ようと、私は真新しいスクールバッグを引っつかんだ。

「あ、亜紀りやん、一緒に帰ろうよ」

「あ、『めん希美、また』こん つた」

「あ、いた」

後ろを向きながら返事をしていたら、ドアに立っていた誰かにぶつかった。この声って、もしかして。

顔を見る間もなく腕を掴まれて、私は無理矢理歩かされた。

「は、え、ちよつ

まずい。非常にまづい。

「は、離してくださこつ」

「ヤだよ、また逃げられちゃたまんないもん」

あ、ヤバい。じつは強引なとこ、全然変わらないんだ。
手を掴まれて歩いていく廊下、通り過ぎていく人の話し声がうる
さい。

本当は、一度との土地に戻つてくるもんかつて、思つてた。

『亜紀ちゃん、今度は引っ越しをしなくなっちゃったの』

そういうて私は父の仕事でフランスへ行くことが決まった。当時の私は小学六年生。お隣りで仲良しだった優は中学一年生で、引越しは次の春が来るころだといわれていた。
あの時はもう、優には彼女がいた。

まさか、こんなに早く戻つてくれることになるなんて、思つてなかつた。

「あ、亜紀？」

「あ、お母さん！」

助かつたとばかりに私は声を張り上げた。私の手をとつていた人も、びくつとして足を止めてくれた。

私に気付いた母は、小走りに近づいてきた。

「『』めんね亜紀、お母さんまたすぐ戻らなきゃいけないみたいだから、しばらへ家空けるわ

「え、ちょっと」

「お金はあるでしょ? じゃあね、って、この人誰よ?」

ちらりと私の隣りの人物に目をやって、母は嬉しそうに笑った。
そういうえば、まだ、腕を掴まれたままだ。痛い。でも、私も、振り
払う気になれなかつた。

だつて、嬉しかつたのも本当だから。

「あ、お久しぶりです、おばさん。優です」

「あつらー、本当に? もう、見違えちゃつたわ、すっかりか
つこよくなつちゃつてー」

男の子つて変わるものねーなんて、年甲斐もなく頬を染めている。
ホント、困つた人だ。

「じゃあまた、亜紀の」とよろしくねー

「 ひ、よろしくしなくていい

こつてしまつてから、はつとして手で口をふさいだ。いつちやつ
た。勢いに任せてしまつたとはいえ、まずかつたかも。

「もう、やあね、この子つたら照れてるのよー。亜紀、荷物は優く
人のお母さんに頼んであるから、早く取りに行きなさいね、これ鍵

よ

突き出されたなつかしい鍵をしぶしぶ受取る。ああ、本当に、帰
つてきたんだ。帰つてきちゃつたんだ。

引越しのことは、前日に迫つてもいえなかつた。

『優の彼女、美人さんだね』

『まーね。亜紀と違つて』

最後の夜、久しぶりに入れてもらつた優の部屋は、それまでとあまり変わつていなかつた。いつも彼女が来ていたり、友達がいたりで追い帰されていたから。

だから、嬉しいはずなのに、なんだか悔しかつた。

『じゃ、私、いらないね』

きつともう、あのときには好きだつたんだ。どうしようもないくらい。それが恋だつたと氣付くのには、しばらくかかつた。気がついた頃にはもう、それが当たり前の感情で、鏡に映つた自分を自分だと認識することのように、深く深く根付いたものだつた。忘れるとか諦めるとか、そういう次元で話ができるようなどいろを通り過ぎたところに、あつた。

「じゃ、またね亜紀。なるべく電話するよつとするわ。優くんも、またね」

「はい、おばさんも、氣をつけ

手を振つて上機嫌で去つていく母の後ろ姿が、妙に憎らしくなつた。

父はまだひとり、フランスにいる。どうして私ひとりで帰つてきたのか、すべては両親の勘違いと行き過ぎた心配によるものだつた。確かに、知らない土地に馴染めなかつたのは本當だ。学校以外の外出は怖くてできなかつた。そしてそんなときの感情の出し方も忘

れてしまった私にとつて、そこは苦痛ばかりだつた。日本に帰りたいだなんて、否定するわけじゃない。けれど、帰りたくない理由の方が強かつた。

『まあ、いなくて変わんないかもな』

日本に着いてから、私は意地でもホテルから出なかつた。母は何回かあの家へ戻つていたらしい。私達が、ではなく私が、日本での生活を始めるために。

母はきっと、父のいるフランスへ戻るんだ、さっきのも。私の両親は、今でも仲が良いから。もしかしたらそのために、私が邪魔だつたのかもしれない。心からそう思つていないとして、そういう風に考えてしまう自分が、かなしい。

ホテルへ戻つてきた母は、優のお母さんとも話をしたと楽しそうにいつっていた。だから、嫌な予感は最初からしてたんだ。

日本の高校に関してなんの知識もなかつた私は、母が決めた高校を受けた。それ以外の高校の情報は、存在すらも一切教えてもらえず、かなりしぶしぶだった。

この土地へ帰つてくることも、この高校へ入ることも。

入学式で呼名なんてしなければわからなかつたのに。

「亞紀」

名前を呼ばれて体がふるえた。こんな感覚、久しぶりだ。固く決めていたのに、泣くもんかつて。

たとえ目の前にしたって、私の心は揺れない。

「帰るから、離して」

「亜紀、話がある」

「ううちはない」

あ、背伸びたんだな。

久しぶりに見た優の顔を睨みつけて、腕を乱暴にふった。私の顔を見て驚いたのか、それとも睨まれて怯んだのか、よくわからなかつたけれど、とりあえず優は掴んでいた腕を離してくれた。

「もう、一度と会いたくないの」

私はもう、戻らない。

あんな風に取り残されるような思いは、充分だ。

私は揺れない。揺るがない。

幼馴染という言葉が幼少期に仲が良かつた友達というなら、私と優はまさにそれだ。

でもそれは所詮、幼い頃の話なのだから。

私にしてみれば、再会は早すぎた。あの家に戻るのは、大学生になつてからと決めていた。

できれば彼氏が出来てからつて、思つてた。

別にもてなかつたわけじゃない。確かに今まで彼氏なんてできたことないけど、好意をもつて接してくる人はいた。

問題は私のほうだ。

『じゃあ、亜紀いなくつても変わんないんだね』

『んだよ、急に、』

《つづん、ばいばい》

かなしいと思つたのは私だけだつたよつじ。

「亜紀つ」

呼び止める優の声を無視して、私はその場を走つて後にした。帰るんだ。懐かしいあの家へ。

大丈夫だつてば。

もう戻らないって決めたじゃないか。

『亜紀はその幼馴染が好きなんだね』

そういつた彼は、やさしく笑つてくれたけれど。彼は、いつだつて私を許して、笑つて、言葉をくれたけど。

どうして私は彼を愛してあげられなかつたんだろう。この三年間で私を支え続けてくれたあの声を思い出す度、どうしようもなく居た堪れなくなる。

時間が解決してくれるなんて嘘だ。

ならどうして、私は変わらない。私の気持ちは戻らないなんて、私にできるの？

「はい、どちら様でしょう」

押したインター ホンからはぐもつた、懐かしい声がした。いろんな雑音が混じっていたけど、すぐに誰だかわかつた。

といつてもこの時間、この家に、他の誰かがいるはずもないから当たり前なのだけれど、とにかく私はその声を聞いて、また現実を再確認したわけだ。

「おばさん、あたし。亜紀です。預かつてもうつてた荷物取りに来ました」

そういうと「ブツッ」と切れる音がした。だんだんドアの辺りに人の気配が増していくのがわかる。

「あ、亜紀ちゃん！ いらっしゃーーい！」

「こなんには」

勢いよくドアが開いて、笑顔のおばさんが顔を出した。あたしは軽く頭を下げる挨拶をする。笑顔は崩さない。

優のお母さんはやっぱり、いつもキレイだ。年を感じさせない、年齢よりはるかに若く見える。おそらく肌のせいだ。田元とか口とかは、優にそっくり。

目に毒、記憶を刺激、心に毒。

「女の子って変わるものねー、見違えちゃったわつ。上がつていかない？」

どこかで聞いたような台詞、そう思つて私はふつと笑みをこぼす。母と同じようなことを、こつてるんだ。

「いえ、片付けとかしなくてやいけないし、荷物を引き取つたらすぐ帰りますから」

不快を感じさせないように、笑顔だけを浮かべる。なるべく家中は見えないよつて。知らないことは多い方が、傷つかないんだつて知つてる。

「あら、やうね。おばさん、何か手伝つことあるかしり」

おばさんは話しながら玄関先に置いてあつた荷物を渡してくれた。大きく膨らんだ黒いボストンバッグは、手にするとずっしりと重かつた。

「いいえ、母が少しばけ付けておいてくれると思いますし、大丈夫です、あ、荷物ありがとうございます」

「いいのよ、気にしないで。困ったときはいつでも来てね」

「はい、ありがとうございます、じゃあ」

「ええ、またね」

胸の前で小さく手を振つて、ドアが閉まる前に優の家から離れた。帰つたらまず掃除をしなくては。

《泣きたいなら泣けばいいじゃないか。亜紀は人形じゃないんだから、流せるでしょう》

手にした家の鍵がひんやりと冷たい。鍵穴に突っ込んで回すと、ガチャーンと大げさなくらい鍵の開く音が響いた。

開けてみれば、昼なのに当たり前に暗い。やつぱりまだ、空気がこもつてゐる感じがする。まずは家の窓を開けるところからはじめよう。

「こんなの、望んでなかつた。一人暮らしで確かに気は楽だけど、ここはしんどい。」

「どうしきつ一つのよ、ひとつで」

こんな広い家で。

何も忘れてない私の心が、軋んでいるじゃないか。

忘れよひ、今は。彼のことも、優のことも、全部忘れてしまえばいい。

樂に、なりたい。

まずはリビングかな。冷たいフローリングを踏みつけて、昼間なのになぜか暗い廊下を歩いた。

窓を開けて空気を入れ替えただけで、家の中はずいぶん居心地が良くなつた。日の光を吸い込んだ室内には、数時間前までの暗さは見当たらなかつた。

私達家族が家を空けていた三年の間、度々優のおばさんが見にきてくれていたらしい。そのままだつたベッドのマットレスや敷布団をベランダに干しながら、ちゅうじ田の前の優の家を見た。

この家は、三年前で時間が止まつてゐる。人の氣配を少しずつ取り戻していくを感じながら、そんなことを思った。

埃をかぶつた家具やテーブルを拭きたくて、置いてあつた雑巾を手にキッチンの流しの前へ立つた。ところが、蛇口をひねつても水は出でこない。すっかり忘れていたが、電気や水道は母さんが頼んでおいてくれたらしいけど、明日にならないと繋がらないんだつけ。じゃあ今日はどうすればいいんだよ。お風呂も入れないのか。

「無用心だね、亜紀」

キッチンの流しの前で私は硬直する。

まさか、どうして。

ああ、そういうえば、玄関の鍵、かけてなかつたつけ。

キッチンの入り口に優は立っていた。さつき話した時と同じ、制服のままだ。

「入ってきたの俺じゃなかつたら、貞操の危機かもね」

日が翳つてきていたのか、逆光なのか、顔がよく見えない。ただ優が発する声には、かすかな怒氣が含まれているようだった。

何をしにきたんだらう、優が私に用があるとは思えない。

だつて私は、はつきり拒否の言葉を口にしたはずだ。大体三年も前に別れたただの幼馴染みに、これ以上かまうなんて、そう、さつき優が教室に来たことの方が、奇跡みたいなものなのだ。

「なにか……？」

「電気とか水道、まだなんだろ。母さんが今晩はようちに泊まりに来いってわ」

「あ、わかった。ありがとう」

ああ、なんだ。そういうこと。優が私に用があるわけじゃないんだ。おばさんがいったから、来たんだ。この家、まだチャイムもならないしね。

もう少し掃除をしてしまったかつたけれど、暗くなってきた室内では何もできないと諦め、手に持っていた雑巾を蛇口にかけた。ふ

うつとため息をひとつ。帰つてから全然座つてない。

戻ってきた日からずっと、休まつた思いなんてしてない氣もある。

「亜紀」

思つたよりもずっと近くで声がした。心臓からびくんと身体がふるえた。振り返ろうと思つたけれど、また「亜紀」と、さつきよつさらに近く、背後から、私の頭の上から声が聞こえて、動けなくなつた。

「な、に。どうしたの……？」

「亜紀」

私を囲つよつて、優は流しに手をついた。何度も何度も、名前をかわやかれる。首を、髪の毛を、耳を、優の息がかすめていく。へりくらする。

「亜紀」

息がかかるほど近くに、動けばすぐ触れられるくらい近くに、優がいるんだつてわかる。ふるえて、痺れていく身体。意識しないと呼吸もままならないくらい、私が分裂していく。

「亜紀、楽しむことしようか」

「な、にいって」

つつ、と優の手が膝から太腿をなぞる。制服のスカートがめぐれ、私はその手を止めようとあわてて手を伸ばした。

「いつ」「

伸びした腕を簡単に掴み上げられる。振り払おうとも痛いくらいに強く、掴んでくる。

「今度逃げたら、許さない」

捕まれた腕から掴んでいる腕へ、視線を移していく。右側の唇の下に小さなほくろ。あの薄い唇が私の名前を呼ぶ。すっと通った鼻筋。私を映している茶色い瞳。

私はよく泣く子だった。

転んでは泣いて、冷やかされたらいつもんで、家に誰もいなくて泣いた。

あの頃は、理由がたくさんあった気がする。

優は中学に上がるまで、両親のいない日には必ず自分の家に帰る前に私の家へ来てくれた。

『あ、見つけた』

リビングでうずくまつて、階段の途中に座り込んで、洗面台の下で、私はいろんな場所で泣いた。特別声を張り上げるわけではなく、体育座りをして小さくした自分の身体を抱きしめながら、じぼじぼとすすり上げた。

必ず、見つけてくれる。
時には意地悪に、帰るフリをして。

『今日は何があったの?』

側に、いてくれた。

私はいつも、一番だった。

『……あき、なつてなんか、ないも、つ』

優はしゃくりあげる私を笑って、意地を張つて顔をこすり、泣いてないと主張する私を笑つて、そうして頭をなでてくれた。
動かない私を引っ張つて部屋まで連れて行つたり、リビングのソファへ座つたり、ひどいときには意地でもその場から動かない私を、まだ小さい身体で抱きしめて、私が眠るか笑うまで、側から離れないでいてくれた。優は、そういう人だった。

「何いつてんの、優。放して」

成長しても泣き虫は変わらなかつた。ただ、泣いてもしょうがないことだけはわかつた。

優は中学へ入つてから、前みたいに家へ来てくれなくなつた。

「なんでフランス行くこといわなかつたんだよ」

「いつ必要がなかつたから

「は? どういつ意味だよ」

「どうこいつて、そのままの意味だよ」

私は今でも泣き虫だ。ただ、堪えることがうまくなつただけ。涙

を流さなくとも、私は泣けるようになった。

彼は泣いている私を見て、いつも困ったように、かなしそうに笑つた。

『またそういう顔をするんだね、くやしいな』

涙が流れないことは、どうだってよかつた。ただ彼がそうして笑つてくれる度、胸が痛んだ。涙を流せなくなつたんだって自覚するから。

結局私は、泣くことで優の気を惹きたかっただけだつたんだつて、わかつてしまつた。泣いたら側にいてくれると、知つてからずっと。

「…………いいや、もう」

そうこうで、優はあつたり私から離れた。

「母さん張り切つてるから、早く来てやつて

キッキンの入り口まで歩いて、優は少しだけ顔を私へ向けた。その顔は、よく知つていた。彼が私へ向ける笑顔に、よく似ていた。玄関のドアが閉まる音が聞こえるまで、私はぼんやりそこに立っていた。

「…………つ、なんだつてゆーのよ…………つ

どうして優が、だつて、あれは。あの表情は。

「嘘つや…………つ

やつぱり、帰つてくるんじやなかつた。

込み上げる熱を噛み殺す。私はその場へしゃがみこんで、じばらく動けなかつた。

まるで昔、そうして優が帰つてくるのを待つていていたときみたいに。苦しくて、うまく、考えてあげられなかつたんだ。自分のことも、優のことも。私はずっと、堪えることに必死だつた。ずっと。

「亜紀ちゃん、遠慮しないでたくさん食べてつてねー」

「はい、いただきます」

私とおばさんと優、三人で囲む食卓はどこなく不自然だつた。優は最初から、一言も言葉を発しない。これでいいはずなのに、また胸が軋んだ。

いつも年の差が気に入らなかつた。いや、優が中学に入つてから、同じ年でないことがこゝやつて私達の時間を少しづつ噛み合せなくしていくんだと知つて、さみしかつたのだ。

「…………」

私がまだ茶碗に盛られたご飯を半分も消費しないうちに、優は私よりも大きな茶碗を空にして、さつと片付けてしまつた。私がいるから、なんだと思つ。

「あ、優。ヒマなら亜紀ちゃんの布団だしといてくれる」

「ん……どに敷くの」

「あなたの部屋」

「は？」

私もおばさんとの言葉を聞いて「え」と箸を落としてしまった。あなたの部屋って、優の部屋で寝るって、こと？

「じょうがなーじやない、急だったからあんまり片付いてなーのよ。あなたの部屋が一番スペースあるし」

「コビングでーじせん」

「ダメよ、寒いわ。風邪ひこぢやうわよ

「あ、あのう」

優が眉を寄せておばさんといっこ合つて、「私は小窓へ口をはさんだ。一人が私へ視線を向けるのがわかる。

「お風呂歸つたら、私、帰りますから

「そんな遠慮しないでいいのよ、亜紀ちゃん。四月つていつたってまだ夜は冷えるし、みんな同じ家で寝たりそれこそ風邪ひいちやうもの」

「でも

優の部屋で寝るへりこなー、風邪でもひいたほうがマシだ、なんてことはとても口にはできなかつた。

「気なんて使わなくていいのよ。それに、昔はよく一緒にベッドで寝てたんだしつ」

「そういう問題か？」

「とにかく頼んだわよー」

そうこうでおばさんはこうと優に向かって微笑んだ。私はといつたら、呆気にとられて何もいえなかつた。優は一度視線を私へ向けると、「……わかつたよ」といつてダイニングから出ていてしまつたから、そりで頭が真っ白になつた。

昔は平氣でその腕を掴めたのに。『好き』だと口にするの、恐怖や打算を感じることもなかつただろう。元のするの

私達はいつもから、変わつていつたのだらう。

なんとなく話さなくなつて、なんとなく会わなくなつて、なんとなく離れた。そこには意味なんてなかつたように思つ。

ただなんとなく。そうしていろいろうちに、時間が過ぎてしまつただけ。そうしている間に、知り尽くしていると思つていた世界は変質してしまつた。彼女とか部活とか、フランスへ行くことが。

ただなんとなく、ただなんとなく。そうしていろんなものが消えていった。なくなつて、変わつてしまつた。時間は、止まることなく流れいくから。

それでも、よかつた。

私と優の間には、どんなことがあつたつて消えない何かがあるのだと、信じていたから。

信じて、いたから。

お風呂からあがると、ドキドキしながら優の部屋へ向かった。家中のすべてが懐かしく、変わらないものを見つけることが嬉しくもあり、変わつていつた私達がかなしくもあった。

優の部屋の前に立つ。なかなかドアに手がかけられない。私って、臆病だったのか。

ドアノブを掴んで、大きく深呼吸をした。それからまた大きく息を吸つて、唇を噛んで、ガチャッとドアを開けた。

「あ、あの、お風呂、あがつたから……びづぞ」

開けてから、せういえばノックをしなかつたなと思った。
さつき吸い込んだ空気を一気に吐き出すよつこ、つつかえながら話した。真つ直ぐ目が合つてしまつたから、余計に舌がもつれたのだと思つ。ヤだな、びづしてこんな風にならなきやいけないんだろう。

「ああ、ありがと」

ふつと顔をそらせると、優は用意していたと思われる服を引っ掴んで私の横を通りて部屋から出て行つた。

「この人は、どうしてこんなに平然と振る舞つていられるのだろう。私はかり翻弄されている。

まだこんなにも、私の胸は傷つくな。
いつも私だけだ。でもじやあ、さつきは何?

優の部屋に入ると、右側に優が寝るベッドがある。そして開けたドアの目の前に、私のために敷かれたのであろう布団があった。

ベッドの奥には、さっきまで優が座つてた椅子に机。数冊のノートや教科書、さっきまで優が読んでいた本、それから雑誌のようなものが無造作に置かれていた。

カーテンの閉められた窓、机の反対側には本棚があつた。なんだかな、本当、変わつてない。記憶のままの部屋と、同じ。

私はしようがなく、優のベッドに腰を下ろしてみた。スプリングの軋む音が静かな部屋に響く。

私は肩にかけていたタオルで、地肌をもむように頭を拭いた。指を動かす度に肩を少し越した真っ黒な髪の先が揺れ、しづくが飛んだ。腕や首に飛んで、とても冷たい。

「なくなりたいな……」

記憶から、私から、今ここから、なくなればいいのに。じてんと体を倒すと、ふわりと優の香りが鼻腔をついた。どうして、ああ、私これだけで、どうしてこんな、安心できるんだろう。

抗えない。緊張の糸、切れたかな。

目を閉じた、そこには、やさしい暗闇があるだけだった。

望む言葉をくれる、彼はいつも。でも、望む人ではなかつた。今でも、夢に見てしまつから。

何も知らなかつたあの頃の私には、もう戻れない。

少し暗くなつた部屋、わずかに開いていた部屋のドア、幼い私は刺激が強すぎる光景。

荒い息、艶めかしい声、声、声。

『まあ、いなくとも変わんないかもな』

心臓がバカみたいに騒がしく、口から出るぐらりに激しく、脈打つた。でも背筋は、頭だけは一本芯が通つたみたいにしゃしゃと冷たかつた。

慌てて逃げ帰ることもできず、だからといってそこで立ち尽くしているわけにもいかず、私は視線を床へ下ろした。

手が震えるほど強くこぶしを握り締め、音を立てないように階段を下りた。踏みしめたはずの階段には感覚がなく、ふにやりしていて、このまま私はこの家に沈み込んでいくんだと思つた。

その度聞こえてくる彼女の嬌声が、私を現実へ連れ帰した。

『優の彼女、美人さんだね』

『まーね。亜紀と違つて』

ああ、なんて。

私、ひとりなんだ。

「　　き、亜紀っ」

怖いのだ、私は。戻りたくない、忘れない。
もう誰かを想つて泣くなんて真つ平ごめんだ。

愛したつて愛し返してくれる保障もないのに、好きになるなんて

バカだ。

誰かに身体を揺さぶられているような気がする。寝苦しさからんと呻き声を上げて、静かに目を開けると、そこは暗闇の中にあつた。誰かが私の顔を覗き込んでいた。

「亞紀？ 大丈夫か

未だ視界はぼんやりとしてはっきりしなくて、なんとなく声で優だとわかり、名前を小さく呼んだ。

どうしてここに、と思ったところで、そういうえば優のベッドに横になつてからの記憶がないな、と思い直した。

もう一度「優？」と呼ぶと、大きな手が私の髪を掬つた。

「怖い夢でも見てたのか

「……なんでわかるの？」

「だつてす」「うなされてたから。心配で起しちゃつた。ほら」

優は私の頬を包み込むように手を当てた。指先が冷たい。

「泣いてる

「うそっ

そつと手を離して見えた優の手が、いつた通りほんのり濡れてい、またやつてしまつた、と思った。

いつも自分は成長していなかつたのかと、心の中だけでため息を

つべ。

「とにかくここで眠ってしまった私がいけないのだけれど。

「どんな夢だったの？」

暗闇の中で、優が笑っているのがわかつた。居た堪れなくなるようなその視線。

私はもう、あの頃みたいに、絶対の信頼を置いてすべてを話すことなんてできない。もう戻らないって決めたから。もう戻れないって、知つていいから。

「ああ、どんな夢だったかな」

「俺には話せないってこと?」

「やつじやないけど」

「じゃあ話して、悪い夢は人に話すといいんだ」

いえるわけがない、と思つ。優はじとじとした目で私を見てくる。月明かりのお陰か、視界にこれといった不自由はなかつた。

私は何かいおうと開いた口をまた閉じて、頭の中で必死に言葉を並べた。

「……夢は覚えてないけど、きっと不安になつたんだよ。だって、ほら、これからほとんど一人暮らしになるわけだし、私にあの家は広すぎる……だから」

「じゃあ寝言で俺の名前呼んでたのは?..」

「 、 」

いわれた瞬間、頭が真っ白になつた。今まで一度だつて、そんなこといわれたことなかつたの。どうしよう、寝言で優の名前をいうなんて、まるで好きだとでもいってるみたいじゃないか。あんたのこと寝ても考えてるって、いつたようなもんじゃないか。

もしこれが日常的にあつたものなら、あの夢を見る度泣いていた、その度に優の名前を呼んでいたとしたら、それはかなり恥ずかしい。

「うわうわ、ジョーダン」

「あ、な、なんだ。もう、びっくりしたじや 」

時間が止まつたかと思つた。鼓膜をふるわすものが、何もなくなつた。

由々しいほどの静寂と、一気に下がつた室内の気温。でも優がその指先で触れた下唇の輪郭だけが、妙にはつまつとしている。

目が優の瞳へ捕らえられて、動かせない。まるでそこに私の意思はないみたいに。

「……ちょっと、カマかけてみたんだけビ

心地いい低音が、頭の中へ流れ込んでくる。笑い飛ばしてしまえば良かつたのだ、そう悟つた。だがそれも、できない。また私は、繰り返してしまつのだろうか。

「世纪つて、俺のこと好き、だよね」

愛したって、愛し返してくれるわけでもないのに。

「……好き、だろ？」

動搖のあまり、頭が真っ白になつて、視界まで白く見えてきて、言葉といつも言葉を忘れてしまつた。

「何もいわなこいつことは……肯定?」

ええ、そうです。

私は今も、こんなにあなたが好きですから。

「ちがつ、びっくりしだけだよ。会わない間に自意識過剰になつたんぢやない？」

でも、もう、戻らない。

「……ウチの母親もわ、俺のことホント、わかつてないよね」

「え」

「ヤリタイ盛りの男の部屋に、女の子寝かせるんだからさ。亜紀も亜紀で無防備だし」

ああ、なんだ、やつぱり。私は、これが知りたかったのかもしれない。

戻れないんだけど、身をもつて実感するために。

優の手は、パジャマの上から私の太腿を触っている。動くにした

がって布が擦れ、あまりにもやさしく触れる優の手はそれだけでやらしく、くすぐつたいような感覚を『えてくる。

手の動きは止まることがなく、身体の中心をなでるよじりして、胸まで上がってきた。

「……抵抗、しないんだ」

「だつて、やめてくれるの？」

「ああ……世纪次第じゃない？」

そうこつこ笑いながらビックリ腰掛け、私のパジャマのボタンを外していく。全部は開けず、肌蹴た服と服の間から手を差し込んできた。

ブリジャーを包むように優の手が触れているのが見えた。

「……生徒会長さうつて、もてるんだろうな」

「どひしてそひ思ひの」

「手つきが慣れてるんだもん」

「別に、そんなことないけど」

「でもクラスの女の子達に早速騒がれてたよ」

「ふーん」

まるで興味がないみたいに、優は手の動きを止めない。なんとか優を見たら、ばっちり目が合って、すぐに逸らしてしまった。い

つから見ていたんだね。」

私が逸らしたのがきっかけになつたのか、優は背中へ手をまわしてきた。あつと思つたときにはブラジャーのホックが外されていた。

「 っ、ねえっ、私ヤだよ、止めて、優」

「 イイじゃん、別に。俺のコト好きなんでしょう？」

その言葉に、かすかに揺らいだ私の心が凍りつくなつた気がした。心臓が掴まれたみたいだ。なんて息苦しいんだろう。

優は笑つて私を見ている。嘲笑うかのように歪んだ口許が、ビリょうもなくいやらしく映つた。

「好き、じゃない.....もん

肩にストラップがかかつたままのブラジャーが押し上げられ、少し冷たいパジャマの布が肌に触れた。思わず私の身体はビクリと反応してしまつ。それを見た優はさりと口許を歪ませ、直接胸を触つてきた。

「 敏感？ くすぐったがりだつたもんね、亜紀は」

もう、何もいえなくなつてしまつた。何をどうすればいいのかもわからなかつた。抵抗するべきなのかも、流されて受け入れるべきなのかも、何も。

『亜紀はそんなになつてまで何に怯えているの？』

少し前、日本へ帰ることが決まつた頃、彼に似たようなことをされた記憶がある。私はそのときも、抵抗しなかつた気がする。

「亜紀？ 何を考えてるの」

「……彼のこと」

躊躇つた後、私は静かにそういった。優の顔を盗み見ると、なんだかとても驚いた顔をしていた。「ぐりとつばを飲むのがわかる。

「彼って、誰？ 彼氏ってこと？」

「……まあね」

彼は彼だから、私がそういうと、優は私の身体から手を離しベッドへ腰掛けたまま顔を逸らしてしまった。

「名前は？」

「なんだつたかな」

「覚えてんだろ、いいからいえよ」

「一郎、とでもいったかな」

優は急に上体を動かし、私の頭の横に両手をついた。そのまま顔も近づいてきた。

「日本人？」

「だつて私、日本人学校へ行つてたんだもん。そりや何人かは似たような事情の子がいたわ」

「そいつとせどりでやった?」

「さあね」

私、何を期待してるんだろう。

ものすごい至近距離で、目が合つたと思つた。

そのまま触れるだけのキスが、唇に何度も落とされた。

私はそれだけでくらくらしてしまって、ぼんやりと開いた目から熱を失っていくのがわかつた。優は一回それを確認すると、今度は舌を捻じ込んできた。

私は抵抗しない。

優の舌は私の舌を追つて執拗に口内を暴れ回る。優の唾液が私の口内へ流れてくるのを感じながら、私は急に怖くなつた。ベッドへ沈み込むというよりは、急に落とし穴に落とされたようなその感覚に、あつと声を上げ優の首にしがみついた。

もひろん実際は、優の口内へ声は消えてしまつたけど。

私の異変に気付いた優が唇を離すと、私たちの息は同じくらい荒くなつていた。

「……どうした、怖い?」

私はただこくこくと首を縦に振つた。こんなに近くにいるのに、元の私がどうしてこんなにひとりなんだろう。

まだ会つてからほんの少ししか経つてないのに、どうしてこんなに、好きだと思つてしまふんだろう。

あんなに固く決めていたのに。戻らないって。今だって、わかつたじゃないか。優は女の子なら誰でもいいんだろうって。確認したばかりじゃないか。

「怖いことなんて何もないよ、亞紀、亞紀、泣くなら泣いて。何でそんなへたくそになつてんだよ、昔はあんなに上手に泣いてただろ」

「優、には、わか……ない、よ」

私は今でも泣き虫だ。

どうして今、「涙腺が弛むんだろう。ひとりでも、彼が抱きしめてくれても、優が側にいなくなつてからまともに泣けた日なんてなかつたのに。」

私はただ必死に優へしがみついて、頭をなでてくれる大きな手にすべてを任せて、思い出したように湧き上がる声を押し殺しながら、ただ泣いていた。優はあるあの頃と同じように「よしよし、いい子だね」なんて耳元でささやく。それがまた涙を溢れさせた。

戻らないんじゃない。

だつて私の心、あの頃のまま、ずっと立ち止まつていただけなんだもん。長い間押し込めてきた、凍りつけようとした気持ちは、こうも簡単に溶け出してしまつた。一度生まれたその想いは、今度はそう簡単に死んでくれそうもなかつた。

でも、でも、溺れちゃいけない。

「余計なことは考えるな、今は泣くのが亞紀の仕事」

変わらずにやさしい手が、そこにはあつた。すべては話せないけれど、身体を委ねることは、まだ、できた。

私は泣き虫、優だけが涙の色を知つてゐる。

「何があつたの？」

私はただ首をふる、左右に。これ以上、この距離を保つていられる自信がなかつた。

幼馴染つてなんなんだろ？。ただの柵じゃないか、そんな重い特権なくつたつて、私はきっと優を好きになる。

名前を呼ばれるだけで、すべてを忘れてしまひへりに幸せな気持ちになれる。

きつと、何度だつて。

「わ、たし……帰る、ね」

しゃつくりみみたいに込み上げる息遣いを抑えようと深呼吸をしながら、巻きつかせていた腕を放した。鼻をすんすんと啜つていると、解いた手首を優の温かい手のひらで掴まれた。

濡れた田で顔を見ると、笑えるくらいに心配そうな表情をしていたので、思わずふつと吹き出してしまつた。

「ダメ、帰らせない」

「何いつてるの、やうこつのは彼女にいつてればいいじょ」

「亞紀、拗ねてるの？」

「なんで私が……バカみたい」

そう、私つてバカなんだよね。いいの、ひとりがお似合いだから。ライフラインすらないあの家が、私には適当なんだ、と思う。私だけを取り残して、みんな変わつていけばいい。そういうのを、私は望んでいる。三年間の空白を過ごした、あの家みたいに。

「拗ねるなよ、泣いてくれないと困る」

「普通逆じゃない?」

「そうかな。だって亜紀、意地つ張りじやん」

意地つ張りと泣いてくれないのが困るので、すぐにはその関わりが見出せなかつた。大体、違和感もなくこうしていられることがから不思議だつた。離れていたはずなのに、なかつたみたいだ、あの日々が。

放して、といつてみたが優の方に聞き入れる素振りはない。ただそう、じつと、射抜くよつた視線を向けてくるだけ。困つた私はため息しかつけない。

「一度と会いたくなつていつた割りにはおしゃべりだね」

「話しつけられたら答えるくらじよる」

「じゃ、おしゃべりしよう

「……いいけど」

わざかに眉を寄せて、首を傾げて答えると、優は嬉しそうに笑つた。まだ手は放してくれそうになつた、と思つた。

「ひさすのつて何年ぶりだらう?」

「ああ、五年くらい経つたんじゃない」

「しつこいつと微笑む顔が、おばさんによく似ているな、と思った。
それから優は私のまぶたにそっとキスを落とした。こんなこと、し
なかつたな。私達が一緒にいた頃には。

あの時いた彼女には、こうしてこのベッドの上でおしゃべりなん
ていつて笑っていたのだろうか。

思い出して唐突に吐き気を感じた。今くらい忘れてしまっていれ
ばいいものを。愚かな自分に自嘲した。

「なんで引っ越す」といわなかつたの

「その」と……

「だつてあれ、いう為に来たんだしょ、俺の部屋」

「覚えてたの?」

「そりゃあね」

私は頭を伏せ、「やう」と息と共に吐き出しだ。

「なあ、どうして?」

「意味なんて大してないけど」

「じゃあ教えて」

「しつこい男は嫌われるよ」

「でも、亜紀は俺を嫌わない」

「ジヨーダン、もう止めとよ」

押し倒されているような状態のまま続けるおしゃべりは、なんとも居心地が悪いものだとわかった。まずどこに田をやつたらいいかわからないからだ。

顔を見て話すと、田が合つて困る。嘘をついていないか伺われているみたいだ。試されている。

だからといって不自然に視線を逸らすのは、認めたみたいで気持ち悪い。それに、さつきから肌蹴た自分の胸元がちらちらと視界を掠めている。恥ずかしいことこの上ない。そのうえまるで優はそういう私で楽しんでいるような雰囲気さえかもし出しているから性質が悪い。

「今、彼女は？」

「どうしてそんなこと聞くの？」

「こねないうちやんと相手してもうひとつ。私、ヤダからね。服着たい」

「どうしてヤなのぞ、俺じゃ不満？」

「やうこひ問題じゃなこと思ひせび」

優は返事をしない。代わりにまたじつと見つめてくる。逃げたいのに逃げられない。閉じ込められたような気分にさせなつてくる。

「勘違いもいい加減にしてよ、ふざけてるなら帰るから」

「「」のまま「」の家に住む『』ないの？」

「ない、なんで住むの？ 意味わんない…… もうここでしょ、おしゃべりはオシマイ！」

せわしげ無理にでも家へ帰れば良かつた。やうしたり「」んな醜態やらすこともなかつたのに。こんな気持ちになることも、なかつたの。

「また、ひとりで泣くの？」

「泣かないってば」

会話を続けていたら、いつか飲まれそうだ。いや、もう飲まれているのかもしない。優のペースに。

まだ何も知らなかつた頃の私が、ひょっこり顔を出してしまってう。

ぎしそうじとベッドのスプリングが悲鳴をあげて、優の顔がまた近づいてきていると気が付いた。

首にキスをしてくる、何度も。髪の毛が肌に当たつてくすぐったい。

顔をあげたから終わつたのかと思つたら、今度はなんの躊躇もなく噛み付かれ、悲鳴をあげそになつた。が、なんとか踏みどまり、今ある自分の状態から目を逸らしそうと思つた。

誰かいる。

少しだけ開いたドアの向こう側で、誰かがこっちを見ていた。あれはきっと、私だ。
ほんやつとそう思つた。

「あつ……」

「これは違う。私が、あの子が、誰かが、そう叫んでくる。

「キレイになつたよね。入学式のとき、びっくりした」

嬉しそうに笑つてる優の顔を見て、私はまた言葉を失つてしまう。
嬉しいと、思つてしまふ自分がいて、嫌悪した。

私はいつから、こんなだらしない考えを持て余すようになったのか。

「泣くの？」

私の変化に気付いた優は、また私の髪の毛へ手を伸ばす。それだけでどうしようもなく幸せで、それがまた私を苦しくさせる。
もう、戻れない。

一番になりたかった。一番だった、昔みたいに。優の一一番近くにいたかつた。

もう、戻れない。一番だったあの頃にも、幼馴染みにも、きっと戻れない。今、許してしまえばきっと。

それも、いいかもしない。中途半端に開いたドアの隙間の向こう側にいる私へ、あの頃の私へ、笑つてみせた。

「……なかないよ

泣かないよ、あの日の私がそつだつたよつよ。今だけは、一番近くにいれる、私が優の一番になる。それは私が、ずつとほしかつたものだから。

* * *

肌寒さを感じて目が覚めた。

身体を動かそうかと思ったのだが、肩あたりに巻きついた腕がそ
うさせてくれなかつた。

半分開いた口、かわいい顔してゐるな。

私、なんでこゝなつちやつたんだろ？

今になつて、なぜだか後悔ばかりが胸を締め付ける。

まだ、私が一番だよ。

抱きしめられている体の間から腕を出して、真っ黒な髪をなでる。
短いな。その顔を見ていたら、鼻の奥がつんと詰まつて目頭が熱くなつた。

どうしたらしいんだろ？

一粒だけ涙をこぼしてしまつた。好きだから、幸せだつて普通は
いうんだろう。目覚めて一番に好きな人の顔が見れるんだから。でも、わからぬ。優が何を考えているのかが、一番。

おばさんに見つかつたら、そつ思つて隣で寝てゐる男を起こさない
ことにした。

名前を呼びながら身体を揺らすと、不機嫌そうに眉を寄せ低く唸
る声がした。腕に力がこもる。まるで起きたくないとでもこゝりつ
なその態度に呆れてしまつた私は、軽く頬をつねつた。よく伸びる
ほつぺただ、と思いつきり引つ張つてみると、痛みに驚いたのかす
ぐに目が開いた。

「あ、おはよ。服着るから放して」

「荒っぽい起こし方するね、痛かつたんだけど」

「優も早く服着たほうがいいんじゃない」

私が眠るはずだった布団の上に、無造作に投げ出された服を一枚一枚拾つて身につけていく。優はそれを、顔に笑みを浮かべながら見ていた。

「なに?」

「キレイ」

「ジョーダン」

急に昨晚の記憶が蘇える。

昨日も何度もそういつてた。あんたは一体その言葉を何人にいつてきたの、眠りにつく前にそう聞いた。優はただ笑つて「誰にも」そういうて私を抱き締めた。

だけど信じることができなかつた、優は決して嘘つきではなかつたとは思つけれど。

私が着替え終わつたのを見届けると、優ものそのそビッグドから這い出して服を着た。優はそのまま制服へ着替えるようだつた。

時計のない部屋だつたので「何時?」と訪ねると、優は携帯を見て「六時過ぎだよ」と答えた。

「私、帰らなきゃ。制服持つてきてない」

「ふーん。朝は食べに来いよ?」

「ん、やつをせてもいい?」

なんだかまぶたが重い。きっと昨晚泣いたせいだ。冷やさなかつたし、いや、冷やせなかつたし。

何をやっているんだろう、ふとその言葉が頭を掠めた。それを考えることは、今の私にはとても苦しいことだった。

結局、私はひとり。なにも変わらない。こんな風に身体を許してしまった自分が、情けなくて、誰かにかわいそうだといわれているみたいだ。

それでも抵抗なんてできない。

あのときは、愛してくれた彼への懺悔のつもりだった。
じゃあ昨日は?

問うまでもない。そんなの、わかりきったこと。でも、もう、ダメだ。

それに私の気持ちといったら、すっかり優にばれてるし。まだ肯定はしていないだけ。

でも、優は違う。そんなことわかってる。それなら精一杯演じてみせようじゃないか。私はただの幼馴染で、お向かいに住んでいて、でも幼馴染から少し外れてしまつただけ。

なんでもないのだ。なんの意味も、なかつたのだ。だから忘れなくては、今すぐ。そうしなくては、きっともつなにも出来ない。

家へ帰つてまず、洗面所へ向かつた。パジャマのまま外へ出るのは、多少恥ずかしかつたがしょうがない。

蛇口をひねると、かなりの時間がかかつたが水が出てきたので安心した。これで今日からはこの家でまともな生活が出来る。

しばらく流しつぱなしにして、自室へ向かう。裸足で歩いた階段は、思つていたよりずつと埃っぽかつた。一体昨日私はなにをしたのか。お母さんも階段までは掃除してくれなかつたんだな。

部屋へ入るとそこだけ不自然にきれいな制服がハンガーにかけてあつた。

まだカーテンのない部屋で着替えることに抵抗を感じながらも、昨日もそうしたのだからと思ってパジャマを脱いだ。確か今日だから明日辺り、帰ってきてから揃えた家具類が届くんだつたつけ。

制服を取ろうとハンガーに手を伸ばしたら、窓ガラスに映る自分の裸体が視界を掠めた。所々に赤い跡が見えて、急に恥ずかしくなる。ああ、だから私は、何をやつてるんだろう。

目を閉じても浮かび上がってきてしまうその光景を振り払つよう に、頭を左右に振つた。それから何かに追いたてられるようにして制服に袖を通した。

私は、間違つてる。
今ごろ後悔したつて遅い。

私は一度トイレへ向かつた。今まで干上がつていて氣味の悪いそこだつたが、何度も水を流すと普通の水洗トイレになつて安心する。水が流れるか、一番心配だつたのだ。

昨日とほとんど中身の変わらないスクールバッグを手に、もう一度洗面所へ向かつた。ボストンバッグから取つてきたタオルを横において、顔を洗う。濡れたままの顔をあげ鏡を覗き込むと、なんと

も情けない顔を、今にも泣き出しそうな顔をした私がいた。

しつかりしろっ！

ぱしゃぱしゃとまた水をかぶる。初めからこんなでビリするんだ。乱暴に顔を拭くと、スクールバッグを持つて向かいの家へ向かつた。

「あ、おはようアキちゃん。『飯できてるわよ』

チャイムを鳴らすと、笑顔のおばさんが出てきた。その笑顔を見たら、少し胸が痛んだ。自分が笑えてるのか、心配だった。

朝食にはトーストにスクランブルエッグ、サラダが出された。外国暮らしだった私への気遣いかな、と思つたが考えるのは止めた。

七時三十分が過ぎる頃には、優と家を出た。

何もいわなくて優の機嫌がすぐいいことだけは伝わってきて、私は困つてしまつ。そんな態度をとられたら、期待してしまう。私がここにいることを、喜んでくれているんじゃないかなって。

「アキ、何考えてんの？」

「優の知らないこと」

「うわー、ヤな感じ」

駅までの道が、やけに長く感じられる。昨日も通つたけれど、駅前以外に大した変化は見受けられなかつた。改札が新しくなつたとか、本屋がコンビニ変わつただとか、そういう感じ。

通勤ラッシュで電車内はかなり込んでいた。あちこち押されつつも、バランスを崩すと優が支えてくれた。

電車なんて、しかもこんなに混んでいるのに乗ったのは初めてだつた。優がいなかつたら一駅で降りたか、人の流れに抗えずに降りるはずの駅を通り過ぎてしまったかもしれない。

「大丈夫?」

「ダイジョバナイ」

「日本だけだもんな、電車混むの」

「うん、苦しい」

また電車が大きく揺れた。ドミノ倒しのように隣の人々に押されて、流されてしまう。その度に優の腕を、身体を感じる。
「んなの、誰だつてときめくよ。いきなり、近すぎる。

すし詰め状態の車内から、優に連れられて降りた。息苦しくてすつかりアナウンスを聞き逃していたが、高校の最寄り駅に着いたらしかった。

「大丈夫か?」

「う、なんとか……」

中年サラリーマンの整髪料の匂いとか若い女のきつい香水の匂いや化粧品の匂い、一日酔いと思われる人から発せられる酒の匂い。そういう様々な匂いに私はすっかり酔っていた。

昨日は泊まっていたホテルから直で来たので、反対方向の電車に乗ってきた。だからここまで電車は混んでいなかつたのだ。

唯一の救いは優がいたことだ。これからはひとりでの電車に乘らなきやいけないと思うと、とても大丈夫とはいえなかつた。

「気持ち悪いのか？」

「ちょっとね……」

「休んでく？」

「いい、そんな重症じゃ、ない」

外の空気を味わうように何度か深呼吸をした。気分はそれで大分落ち着いた。

改札を抜けると同じように登校する生徒がたくさんいた。あまりの気持ち悪さに忘れていたが、きっと降りたときにもこの中の何人かとすれ違つたんだろう。

ぼうつと歩いていると、空いていた右手が何かに包まれた。それが優の手だと気付くのに、そう時間はからなかつた。

「……優？」

「なんか、小さいときみたいじゃない？」

「へ？」

「小学校へりこのときまつもいひやつてが、学校まで行つたじ
やん」

「ああ……そうだった、ね

今みたいに、私は優に手を引かれながら、真っ黒なラングセルを見つめていた。

同じように顔を少しだけあげて優の背中を見る。変わらない、私より高い背とか、短いけど黒く光る髪が揺れることとか。隣で歩いてたらきっとわからない、優の背中がこんなに広くなつたことだつて。

あの頃は、全部私だけのものだつた。昨日の夜だつて、きっと私だけのものだつたと思う。そう願つている。

でも、事実は違う。今は、違う。もつ私は、この人の一番にはなれない。

広い背中の後を追つてまだ慣れない通学路を歩きながら、私は唇を噛み締めた。

* * *

「あ、亜紀ちゃんいたーっ」

教室に着くと息を切らした希美が走つてきた。何人か、昨日話した女の子もいた。

「おはよー」

「おはよー、てか亜紀ちゃん会長と知り合って?」

「え……なんで？」

「あたし中学の時の先輩と来たんだけどね、あの会長が一緒に登校してたつてすごい噂になつてて、先輩のお友達さんが来て……しかも手まで繋いでたつて！」

「あー……」

なんか、めんどくわざつな展開。

「知り合い、だね」

「どういう関係つ？ 付き合つてるの？」

確かに佳織カオリという名前の子が、誰より意気込んで聞いてくる。

髪もほとんど色の抜けた金に近い色をしていて、化粧も濃い。私はこういう子があんまり得意じゃない。

もうひとり、茶色に染めた長い髪にパーマをかけてる子は菜津子ナシコといった。その子も佳織ほどではないが、穴が開くんじゃないかと思うくらいに私に視線を送つているのがわかつた。

希美が一番マシだ。どうしたらこういう人達が集まるんだろう。類は友を呼ぶつていうのに。出席番号のせいで席が近かつたからか。

「別に、たまたま電車が一緒で」

「でもや、昨日も一緒にいなかつた？」

「ああ」

そういうえば昨日、優は教室まで来てたから、希美には確實に見られたはずだ。

希美は私と、主に佳織のやり取りに、心配そうな視線を送っている。

「親同士が知り合いで、呼びに来てくれただけだよ

「ホントに？ ホントにそれだけ？」

「うん、それだけ。特に何もないよ

「なーんだ、つまんなーい

「でもさ、それなら会長紹介して！」

「は？」

「だつて知り合いなんでしょう？ 会長めっちゃカッコいいし

紹介つて、優になんていつたらいいんだ。しかもそれつて、佳織だか菜津子だかは知らないけど要是は近づきたい、彼女になるっていう目的があるつてこと、だよな。

「……そのうちね

そういうのつて、優は喜ぶのだろうか。どうこうのが好みだとか、私は全然知らないし。

私が適当に会話を続けると、二人は嬉しそうに騒ぎ始めた。起きやあきやあ甲高い声が耳につく。化粧の匂いが不快に香る。

「持つべきものは友達だよねっ！」

利用できる、でしょ。めんどくさいな。学校なんて。いや、女って。

「ねえでも、手を繋いでたのは本当なの？ 普通そつこつことする？」

「え」

ちょっと、希美ちゃん。そういうのはわざわざ口に出していくわなくていいんだよ！ 頭の中で叫んだ。黙つてたら佳織も菜津子もご機嫌なままだったのに。

一人のまとう雰囲気が、わかりやすいくらいに変わった。睨まれている、今顔を見たら、私は何をいわれるのだろう。

私が返事に困っていた所で、タイミングよく担任が教室へ入ってきた。お決まりの席へ着けつて台詞、教壇に担任が持つてた荷物、おそらく日誌や出席簿なんかを置くのとほぼ同時にチャイムも鳴った。

おかげで私は無事に解放された。希美は隣の席だから近いが、佳織と菜津子は私がいる席とは反対側の希美の隣の列に席があるので、話し掛けられる心配はない。

朝のSHRは担任の間延びしてビリの訛りだかわからない調子で進められた。今日もまだ授業はない。

「えー、今日はこれから体育館で入会式やってもらつ。終わってから四限までは先輩方が委員会説明に来てくれるからな。それから五

限は体育館で部活紹介。えー、六限は部活の自由見学の時間。その後帰りのショートあるから教室に戻つてくるようにな

そんなめんどくさいことするんだ。でも佳織と菜津子からは逃げられそうだな、こういうこと考える私つて不謹慎なのかな。あれ、不謹慎ってこういうことに使わないっけ。友達思いじゃない？でも昨日会つたばかりの友達を大事にしろってトコに無理があるわけだ。

入会式は以外に早く終わった。先輩方が学校紹介がてらスキットをしたり、新任の先生の紹介だったり。問題は、教室に帰つてからの委員会説明だった。

その委員会の委員長と副委員長と思わしき人が代わる代わる入ってきて委員会についての説明をするだけなのだが、イヤなものは一番最後にやつてくる。

「生徒会です。今、書記が不足します」

どうして、一年生に生徒会役員の勧誘がくるんだろうか、問題だわい。

「今度の選挙は三日後に立候補者受付をして、それから一週間後に選挙となります」

しかもだ。教室のほとんどの女の子が説明してる一人をじつと見詰めているのだ。

「ぜひ生徒会役員立候補、お願ひします」

ほとんどが会長、つまり優がひとりで説明している。隣に立つて
る先輩は、さつきからこここと笑顔を振りまいて、これまた視線
を独り占めしている。

優かもうひとつ先輩か、どうやらクラスの女の子はこの一人の
先輩の間で真つ二つに分裂中らしい。

「あー、説明終わった。まだ時間あるな

「えーじゃあ俺自己紹介しちゃうー。」

「は？」

「えーっと、寺嶋貴^{テラシマカン}、十七歳、三年C組で会長と同じクラスで一つ
す！ ちなみに彼女募集中なんで、あ、そこの女の子とかどう?
俺やさしくするよーっ」

いわれた子は真つ赤になつて、クラスのあちこちで笑いが起つる。
しかもその真つ赤になつてる子は希美だった。かわいい反応だ。

「あ、チャイム鳴っちゃつたー」

「じゃあこれで、失礼します」

結局、一回も田、合わなかつたな。私が逸らしてたんだけど、でも
もやつぱりさみしい、と勝手なことを思つ。

頬杖をついて床に視線をめぐらせていたら、視界が急に暗くなつ

た。

「亜紀」

聞き覚えのある声、さつきまで聞こえていた声。それが私へ向かれた、というだけで、正直に心臓はその存在を大きく主張はじめる。

「な、なんですか？」

「デキデキしながら、優に向かつてなれない敬語を使つ。

「なにかしごまつてんの？ 今さら」

「一応……先輩、ですか？」

危ない。こんなみんなの目の前で普通に話してたら後が怖い気がする。周りの視線がなぜか怖い。

「まあいいや。弁当、渡し忘れてたから。一緒に食わない？」

「え」

思いがけない誘いの言葉に、驚いて顔をあげた。やせしい顔、優が持っていたスクールバッグから一つ分の弁当箱を出しているのが見えた。

「それ、おばさんからですか？」

「そ、亜紀さえよければ毎朝だつて作る氣らしによ

「え、えと……」

困る。そんな風にみんなの前で話し掛けないで欲しい。視線が痛い。ただでさえ優といふと平常心を保つていられないというのに。

「あ、優がいってたのってその子ー？」

声がしたと思ったら、優の後ろから寺嶋先輩が顔を出した。
近くで見ると、まだ少年っぽさが残る幼い顔をしている。一年生
といつてもわからないかもしれない。

「へー、かわいいじやん。いいなー彼女！俺もほしー」

「は？ 彼女って、誰、ですか？」

「えー、君が優の彼女でしょ？ カワイイ、ボケちゃって

「ちが　　っ」

否定しようと口を開けたら、何かでふさがれた。それが手だと気が付くのに、数秒。苦しさに若干の恐怖を感じた。

「そうそう、亜紀は俺の彼女なの。ってことで失礼」

「この人は、何をいい出すんだろう。

ぱっと手を放し、今度は腕を引っ張つて無理矢理立たされた。そのまま教室から連れ出される。

口をふさがれていたおかげで、息が荒かつた。少しだけ咳き込む。

酸欠からか、頭がぼうっとしている。見えるのは優の背中だけだ。
感じるのは繋がれた手の感触。

まだほんと歩いたことのない校舎の中、どこかへ向かつて手を引かれている。

頼りは優だけだ。

昔からそうだったつけな、ぼんやりと思つた。

* * *

「どう……」

「生徒会室だよ。那儿、座つて

いわれて指示された椅子へ座つた。昔から優のいいなりだよな、と思つた。口では抵抗しても、足はついていくことしかしてない。私が優に唯一反抗できるのは、この口だけなのだ。

「なに、さつきの」

「なんの話?」

「彼女」

私がそういふと、優は教室を出てからはじめて私の顔を見た。

「お前は好きでもない奴に抱かれるわけ?」

突然の質問、少しいライラクしている、怒っている顔だ。その表情

に、私もイライラしてしまう。

「それは関係なくない？ 抱いたらみんな彼女なの？ 私、優がなに考えてんだか全然わかんないんだけど」

ぶつけてくる視線を睨み返しながら、まくし立てるように言葉を並べた。

優は立つたまま、ただ見てくるだけだった。

「なんかいってよー」

泣かない、泣かない。私はひたすら睨む。泣かない。私は怒っているんだ。

今泣いたらきっと、いつもみたいにうまく丸め込まれてしまう。

「……ごめん、亜紀

なにがごめんなんだ、その言葉が喉まで出掛かるのだが、どこか甘い響きを持ったその声に私の神経といつ神経がほだされる。動けなくなってしまう。

私はいつだって、優に弱い。

「迷惑、だつたか？」

私は答えない。もう質問の意味がわからない。

「本氣で、イヤ、だつたのか？」

今は私の声すら余計な音でしかない。タイミングを外せばきっと、

「……俺より、好きな奴できたの？　俺の口へ、好きじゃなかつた？」

半分開いた口からは、空氣しか出でこない。喉の奥で何かが蠢いているけれど、それはどんな意味をもつた言葉なのか、崩れた思考には判別不能。

「亞紀、答へて」

私の目には今、優しかいない。
私の中にはもうずっと前から、優しかいないのだ。

「じゅ……順番が、違うじやんか」

「え？」

「なんで、本当に彼女つていつてんだつたら、遊びとか魔がさしたとかじやなくて、本物なんだつたら、順番……違うじやんかっ」

私達はただの幼馴染だけど、たまにその道を外れる。どんなに近くたつてただの友達なのに、たまにその道を外してしまつ。誰よりも近くにいるという錯覚。

離れていた二年間の間に、お互いに何があったのか、知らない。それでも、それでもその間にあつたことを、私は知りたいと思う。それは多分、幼馴染みだからじゃない。好きだからだ。優だつたからだ。だから私は、抵抗しなかつた。できなかつた。

「『』めん」

小さく、弱々しく、優は顔を伏せてそう言った。優のその姿に、なぜか泣きたくなつた。

好きだなんて、認めた所で好きになつてくれるわけじゃないのに。

「じめん……わかってると思つてた」

「私、優じゃない。優が私の考へてることわかつたって、私は……わかんない、」

「うん……」じめんな。俺、余裕なくて

気がつくと、優の手が私の頭にあって、変わらないその大きさで思わず抱きついた。

「だつてやつと、亜紀に会えたのこ

昔泣いたときは、いつもこう体勢になることが多いった気がする。抱き締めてくれる腕の温かさはすこつとも変わらないのに、心なんてややこしいものがあるから見えなくなる。

言葉にしてみたらそれは呆氣ないくらい単純なのに、きっと何千回、何万回と使い古されてきた言葉なのに、自分の気持ちにそれを当てはめるのはすぐ難しい。

相手の心は尙更、つかめない。

「好き、なんだ。急に、何もいわないでいなくなるから、すごい心配してた。どうしてつて、思つた。会いたくて、ずっと会こたいつて亜紀のことばっかり思つてたんだ」

そんなの、嘘みたいだ、と思つ。

心臓の音が心地よい。私はこの音が好きだった。昔も、今も、それは変わらないようだ。

「会つたら、亜紀がいるつて思つたら、なんかそれだけで嬉しくて、亜紀のこと考える余裕、全然なかつた。亜紀だつて俺と同じだと勝手に思つて、なんか、勘違いしてた……ごめん、な」

「バカ……もう、大つ嫌いつ

「うん、じめん。それでも俺、すっげー亜紀が好きだから。だから、もう、いなくなんないで。お願ひ

「嘘つか……自分勝手だよ、そんなの」

「うそ、わかつてゐる

少しだけ腕がゆるみ、小さく顔をあげる。優は私の顔を見ていた。そうしてやせしく、笑つた。

「それでも、俺は亜紀だけが好きだから。それだけは一生、変わらない。亜紀なら……亜紀だけは、放したくないんだ。俺は、気付くの遅かつたけど……亜紀に彼女になつてほしい」

亜紀がこれから先、側にいなんて耐えられない。我だけに聞こえるような小さな声で、耳元でささやいた。

恥ずかしい台詞をよくもそんな抜け抜けと。そんなの私が拒否できないわけないじゃないか。

それも全部わかつてていつてるからむかつくんだ。だから逃げられない。

「……あんなこと、いつつもやつやつて、閉じ込めるんだ

その瞳の中。腕の中。ひとつの一言葉の中。

「好きだよ、垣紀。垣紀は？」

「……好き。だもん、バカ」

不満たっぷりに唇を尖らせて、聞こえないかもしないくらい小さな声でいった。でもきっと伝わるだろう。優には、優にだけは口に出せない言葉さえも拾い上げるのが、昔から優は得意だったから。

その後は、あつとあつと一緒に。

=END=

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1645d/>

empty complex

2011年1月15日02時21分発行